

# 吳興凌氏刻『世說新語』四種について

表野和江

## 一 はじめに

白話小説の作者、戯曲家として知られる凌濛初（一五八〇—一六四四）を中心に、明代の萬曆年間末から崇禎年間にかけて多くの套印本（多色刷り）を出版した吳興（現在の浙江省湖州市）凌氏の刻書の中に、四種の『世說新語』のテキストがある。すなわち、『中國古籍善本書目』<sup>①</sup>子部卷一八雜家類に著録される凌濛初刻『世說新語三卷』、『世說新語補四卷』、『凌瀛初刻『世說新語六卷』（四色套印本）、同『世說新語八卷』、『同『世說新語八卷』（四色套印本）である。これら凌氏刻『世說新語』（以下、凌刻『世說』と略稱）については、『四庫全書總目』等、後人による書目題跋中にも若干の記述を見出すことができる。しかし、たとえば王重民が、「凌刻『世說』に六卷本と八卷本の別があることは廣く知られるにもかかわらず、その先後を知る者は少ない」と指摘するように、それらの記述は各テキストに關する個々の情報を提示するにとどまり、凌刻『世說』全體を俯瞰してテキスト間の關係にまで及ぶものではなかった。<sup>②</sup>

いま『中國古籍善本書目』に著録する各テキストの、中國大陸公庫における所藏狀況を見れば、『世說新語三卷』、『世說新語補四卷』が八

本、『世說新語六卷』（套印）が十本、『世說新語八卷』が十四本、『世說新語八卷』（套印）が四十六本と、とくに傳本の多い套印八卷本以外でも各十本前後が現存する。それでも、容易に版本の種類や所在を知ることのできなかつた時代にあつては、四種すべてを目睹するのは困難であつたろう。右のように指摘して凌刻『世說』に論考をくわえた王重民自身、實際に目睹し得たのは套印六卷本と套印八卷本の二種のみ、三卷本は「未だ見ず」と言い、また墨印八卷本についてはおそらくその存在を知らなかつたのであろう、全く言及していないのである。<sup>③</sup>

では現代の『世說新語』研究の中で、これら四種のテキストはいかに扱われているのであろうか。『世說新語』の版本に關する研究は多いとはいえない。その中では八木澤元「世說から新書・新語への發展——世說新語傳本考——」（一九七二年、鳥居久靖先生華甲記念論集『中國の言語と文學』收）、同「世說新語簡説」（一九七五年、『新釋漢文大系世說新語上』月報）、また近年では王能憲『世說新語研究』（一九九二年、江蘇古籍出版社）第二章「世說新語」的版本、箋注與批點」が、詳しく版本の別を論じている。王能憲氏は、明代に『世說新語』が空前の盛行を見た要因は、日本における『世說』ブームにも多大な影響を與え

た王世貞刪定『世說新語補』の流行にあつたとされたうえで、その『世說新語補』に批點を附した李卓吾批點本とともに凌刻『世說』を、『世說新語』の普及と傳播にとつて計り知れない効果のあつた『版本』と評される。しかるに、そこに列擧された諸版本（明版二十六種）中には套印六卷本がなく、かつ他の凌刻本についても出版の先後を問題としない點は八木澤氏と同様である。このほか楊勇『世說新語校箋』（一九六九年、香港大衆書局）や徐震埗『世說新語校箋』（一九八四年、中華書局）が、それぞれ參校した書として「凌濛初刻本」を擧げており、これが主要なテキストの一つと位置づけられていることが知れるが、なぜかいずれの注釋書も、どの一種を用いたのかは明記しない。

つまり従來の研究において凌刻『世說』は、その版本としての重要性は十分に認識されながら、全體像の把握という點ではほとんど注意が拂われてこなかつたといつてよいであろう。先の王重民の指摘は、半世紀を経てなお未だ指摘のままにとどまつているのである。

以下、上海圖書館、復旦大學圖書館、南京圖書館の各藏本を手がかりとして、實見と未見が相半ばするなかから導かれた王重民の論考を検證しつつ、凌刻『世說』四種について考察をくわえてみたい。

## 二 王重民の論考

上述のごとく、王重民が目睹し得た凌刻『世說』は、套印本の二種のみであつた。そこには刊行者である凌濛初の次の序文が附され、套印本出版にいたる經緯を傳えている。

余弱冠の時、幸いにして王次公（世懋）批點の『世說』一書を睹す。發明詳備たること、鉅觀と稱す可し。豫章（江西南昌府）

藩司中より刻さるるを以て、家傳戶誦すること能わざるを恨みと爲す。壬午（萬曆十年）の秋、嘗て之を梓するを命ずるも、殺青幾ばくも無く、惜しむらくは板忽ち星失す。余唯だ是れ志有りて未だ速ばざるのみ。嗣後家弟初成（濛初）、馮開之（夢禎）先生祕する所の（劉）辰翁、（劉）應登兩家批註本を得、之を刻して「鼓吹」と爲す。欣然として曰く、向年靈簡殘編已に煨燼と成るも、今其の全きを摺據するを獲たり。良に快事たり、と。之を行ふこと已に久し。獨だ圈點を載せるを失することのみ未だ遺珠の嘆有るを免れず。予復た三先生の手澤を合わせ、耘廬（劉應登）は綴るに黄を以てし、須溪（劉辰翁）は綴るに藍を以てし、敬美（王世懋）は綴るに硃を以てすれば分次井然たり。庶わくは覽者別識に便ならんことを云。

凌濛初、字は玄洲または彦仙、號は玉蘭、吳興の人。凌濛初の從兄である。刊刻した書には他に『韓非子』二十卷、『紅拂記』四卷（朱墨套印本）があり、また凌濛初輯『孔門兩弟子言詩翼』七卷には濛初の息子たちとともに校閱者として名を連ねている。さて、この序文のうち王重民が問題としたのは、濛初刻本について記す「嗣後家弟初成……」以下の内容であつた。一方、冒頭部分については、「壬午の年に『これ上梓するよう命じた』のが誰なのかはわからない」と述べ、わずかに「『これ』とは」王世懋の豫章刻本を指すようだとコメントするのみで、それ以上の議論は避けている。そこで今、冒頭部分についてはひとまず措くことにし、王氏が問題とするところに焦點を絞つて考察をすすめる。

序文によると、凌濛初が馮夢禎の死後にその祕藏する二家批註本を手に入れて出版し、のち、これに圈點が附刻されなかつたのを残念

に思っていた瀛初が、劉應登・劉辰翁・王世懋三家の批語とともに套版で刻して出版したが、すなわち四色套印本『世說新語』である。劉應登、字は堯咨、號は耘廬、江西吉安の人、南宋末景定間の進士。劉辰翁（一二三二—一二九七）、字は會孟、號は須溪、同じく江西吉安の人で景定三年（一二六二）の進士。明代には『劉須溪評點九種書』が出版されるなど、元代を代表する評點家である。王世懋（一五三六—一五八八）、字は敬美、號は麟洲、太倉（江蘇省）の人、嘉靖三十八年（一五五九）の進士。古文辭派後七子の領袖王世貞の弟で、藏書家としても知られる。上記瀛初の序からは、濛初刻本を底本として套印本が刊刻されたことまではわかるもの、六卷本と八卷本のいずれが先かを知る手だてではない。

さて王氏は套印本二種を對校した結果、まず未見の濛初刻本については、

① 濛初が馮夢禎の藏書を入手して刊行したのは萬曆末であろう。と推定し、さらにそれと關連して、

② (套印本の) 本文は墨印であり、これが天啓・崇禎の諱を避けていないのも、濛初が先に「墨板」を刻し、瀛初が後に「套板」を刻した證である。

と言う。②はやや論旨を読み取りにくい、どうやら王氏は套印本の本文(墨印部分)は濛初刻本とは同版、もしくはその覆刻であり、そこに瀛初が色刷りの評點をあらたに刻して配したと考えたようだ。また套印本二種の先後に關しては、

③ 二種を對校した結果、はじめて八卷本を後印と判定した。と斷じている。王氏によると、八卷本卷一の全丁(三十四丁分)は六卷本と同版で、八卷本が卷二の卷頭書名と小題の二行を増出するた

吳興凌氏刻『世說新語』四種について

めに六卷本の卷一第三五丁の注文を一部削り、その一丁はまるまる改刻しているという。

以上を要するに、凌刻『世說』諸刊本についての王氏の説は、およそ次のようにまとめることができよう。

凌濛初刻本(→修訂または覆刻) ↓ 凌濛初刻套印六卷本

同套印八卷本(→修訂)

### 三 王論の檢證

では、王重民の論考(以下、王論と略稱)①から③を、個々に檢討して行きたい。今回筆者が閱覽を許された南京圖書館藏本(濛初刻本)と上海圖書館藏本(套印本二種)に基づき、各刊本について若干の書誌的紹介をしつつ見て行くことにする。

【南京圖書館藏 凌濛初刻三卷本】

紺色表紙(二七・三×一七・一)種。首に凌濛初「世說新語鼓吹序」、同「凡例」十二則。ついで「世說新語舊序」として耘廬劉應登、嘉靖乙未(十四年) 吳郡袁聚、萬曆庚辰(八年) 吳郡王世懋、萬曆丙申(二十四年) 渤海吳瑞徵の各序があり、改行し低三格にて「愚按是序發明世說……」と凌濛初の按語を附す。「世說新語題詞」と題す高氏緯略一則の後、萬曆辛巳(九年) 喬懋敬「世說新語題詞」、また「世說舊跋」として紹興八年董弁、淳熙戊申(十五年) 陸游の各跋がつづき、さらに「世說新語紀事多謬」「世說人物」「鼓吹諸家姓氏」「世說新語目錄」を備える。本文卷首「世說新語卷上之上」宋劉義慶撰/梁劉峻注/明凌濛初訂」と題し、次行より「(低三格) 德行第一/陳仲舉言爲士則。……」と本文がはじまる。左右雙邊(二三・四×二・一)種、うち上層三・八種)

有界九行二十字、注小字雙行。句點を附刻。肩上には劉會孟(辰翁)・王敬美(世懋)・凌初成(濛初)等十二人の批語を附刻す。版心白口單黑魚尾「世說新語 卷上之上 德行 (丁付)」等に作る。唐大七冊。京都大學人文科學研究所附屬東洋學文獻センターに藏本あり。篇目は、

卷上之上… 德行 言語

卷上之下… 政事 文學

卷中之上… 方正 雅量 識鑑

卷中之下… 賞譽 品藻 規箴 捷悟 夙惠 豪爽

卷下之上… 容止 自新 企羨 傷逝 棲逸 賢媛

卷下之下… 排調 輕詆 假譎 黜免 檢齋 汰侈

忿狷 讒險 尤悔 紕漏 惑溺 仇隙

と分けられ、これは南宋陸游刻本を重刻したことが知られる嘉靖十四年袁褫嘉趣堂刻本(四部叢刊收)に一致する。『世說新語補 四卷』の書誌事項は略す)

凌濛初序に「鼓吹」と稱するこのテキストは、大部分の凌氏刻本と同様に刊記等をもたないため、正確な刊年は不明である。しかし上記の凌濛初序を勘案するに、濛初は馮夢禎の死後にその秘藏する二家批注本を入手し、自注もまじえた諸家注をあわせて出版したものと知れる。馮夢禎(一五四六—一六〇五)、字は開之、浙江秀水の人。萬曆五年(一五七七)の進士、官は南京國子監祭酒に至る。濛初とは姻戚關係にあり、親交のあったことが知られる。馮夢禎が亡くなった一六〇五年は萬曆三十三年にあたり、また王論②に言うところの天啓・崇禎の諱「校」「檢」を、この刊本の本文も避けていない。したがっ

て、これを「萬曆末刊」とした王氏の①の推定は妥當であろう。

ところで『四庫全書總目』には清の章鉞の序を引いて、「吳興凌初成原刻、悉遵古本、分爲六卷」とあり、『萬卷精華樓藏書記』にも、「明凌濛初原刻世說六卷」と記される。「六卷」とあるのは、いうまでもなく濛初刻本が上・中・下三卷をさらに上・下に分かつことによるが、ここに「原刻」と言うのは、濛初が出版した『世說新語』刊本がこれ一種のみである以上、複數種存在する凌刻『世說』の中で最初に刻されたテキスト、との見かたを示すものと考えられよう。これについては後述したい。

つづいて套印本二種である。上海圖書館藏本を對校した結果、王氏の指摘した同版部分、および六卷本卷一第三五丁と八卷本卷二第一丁の異同について確認ができた。ただし、王氏はこの別版部分を「六卷本の注文を削った」と見做して八卷本後印の證とするが、これはやや速断にすぎよう。一般に、刊本の卷數は時代が下るにつれ増える傾向にあるのは確かであるものの、その逆があり得ぬわけではなく、八卷本の注文を増補して六卷とした可能性も無しとはしない。その意味で、王氏の論據は不十分といわざるを得なかつた。今回、二本を照らし合わせ、あらたに八卷本後印の確證を得たので以下に示す。例によつてまず二本の書誌事項を紹介する。

【上海圖書館藏 凌濛初刻六卷本 (四色套印)】

香色表紙(二七・四×一八・二釐)。首に王世懋「批點世說新語序」、つづいて「舊序」として劉應登・袁褫・喬懋敬の序。つぎに「舊題」として高氏緯略一則、「舊跋」として董弃・陸游の跋があり、改行し一格を低して「余弱冠時……」と藍印にて凌濛初の序を附す。さらに「世說名字異稱」「同姓名」「二人兩名」「名

與字同」「世說新語目錄」あり。本文卷首は「世說新語／(低二格)德行／」と題し、本文初行へつづく。四周單邊(二〇・九×一三・七輝)無界八行十八字、注小字雙行。朱にて句點、朱・藍にて傍點と傍圈、藍にて傍抹をそれぞれ附刻し、眉上に劉會孟(藍)・劉本註(黃)・王敬美(朱)の批語を、書體をも別して刻す。版心白口魚尾なし「世說卷一 德行 (丁付)」等に作る。唐大六冊。このテキストは日本の公庫においてはその所在を知らない。篇目は以下のごとく、「言語」を上・下に分かつ以外は濛初刻本に等しい。

卷一： 德行 言語上

卷二： 言語下 政事 文學

卷三： 方正 雅量 識鑑

卷四： 賞譽 品藻 規箴 捷悟 夙惠 豪爽

卷五： 容止 自新 企羨 傷逝 棲逸 賢媛

術解 巧藝 寵禮 任誕 簡傲

卷六： 排調 輕詆 假譎 黜免 檢齋 汰侈

忿狷 讒險 尤悔 紕漏 惑溺 仇隙

ただし、篇目では「賞譽」を卷四卷頭に置くが、実際には卷三「識鑑」のつぎに「賞譽上」が配され、卷四卷頭は「世說新語／(低二格)賞譽下／林下諸賢。各有偏才子。……」と、「賞譽下」より始まる。ここに見える篇目の誤脱は、じつは前掲の嘉靖袁襲刻本も同様であり(濛初刻本にこの矛盾はない)、「賞譽下」本文の始まる箇所も一致することから、本文に關しては袁襲刻本、または袁襲刻本に忠實な重刻本を直接の底本としたと考えられよう。

【上海圖書館藏 凌瀛初刻八卷本 (四色套印)】

吳興凌氏刻『世說新語』四種について

後補紺色銀砂子表紙(三〇・二×一八・八輝)。前附けは「名與字同」まで六卷本に同じ(同版)。「世說新語目錄」二丁は別版で、篇目は次のようである。

卷一： 德行 言語上

卷二： 言語下 政事 文學上

卷三： 文學下 方正

卷四： 雅量 識鑑 賞譽上

卷五： 賞譽下 品藻 規箴 捷悟 夙惠 豪爽

卷六： 容止 自新 企羨 傷逝 棲逸 賢媛

術解 巧藝 寵禮

卷七： 任誕 簡傲 排調 輕詆上

卷八： 輕詆下 假譎 黜免 檢齋 汰侈 忿狷

讒險 尤悔 紕漏 惑溺 仇隙

なお、「賞譽下」本文は「簡文目庾赤玉。省率治除。……」から始まつており、王氏に指摘のあつた「言語」篇とともに、上・下を分かつ箇所が六卷本とは異なる。唐大八冊。東京内閣文庫、東洋文庫等に藏本あり。

さて、八卷本後印の事實を示すのは次の一例である。六卷本卷一第一丁裏には黄で「劉本註○／謂陳欲便／看孺子而／主簿欲其／候入摩後」の眉批が附刻されるが、八卷本はこれを「劉應登曰／……」に作り、かつ文字の異なる「應登曰」の三字のみが他行とズレているのである「圖2」。同丁は、この三字以外は六卷本と同版であつた。よつて、これは明らかな埋木による改刻の跡と判断できる。このほか修訂は、各卷卷首本文の始まる箇所が六卷本と異なる卷(卷二、三、四、五、七、八)で、卷頭の書名と小題を刻す二行分を増出および削

除する必要から注文に對する削除・増補がおこなわれているのを始め、版心の巻數・丁付の改刻、匡郭の埋木、眉批の場所移動等にも及んでいた。なお、套印本二種を瀛初刻本の修訂もしくは覆刻と考えたらしい王論②については、兩者は版式も異なる全くの別版であること、ここに見るとおりである。

以上の考察から、王氏の論考にやや修正をくわえた結果を改めて示すと、次のようになる。

瀛初刻本↓瀛初刻套印六卷本（修訂）↓同套印八卷本

凌刻『世説』のうち三種に關する王氏の説は、上記のごとくほぼ正しいことが確認された。それでは、王氏がまったく言及していないもう一種の凌刻本、瀛初刻墨印八卷本はいったいどこに位置づけられるべき刊本なのであろうか。

#### 四 もう一つの凌刻本

##### ——瀛初刻墨印八卷本

瀛初刊行になる八卷本『世説新語』には、套印本の他にもう一種、墨印本が存在する。このテキストについては管見の限り王重民以前の書目に見えず、その存在はあまり知られていなかったものと思われる。よつて、刊本を目睹する機会を得なかつた王氏に言及がないのはやむを得まい。しかしながらこの刊本の存在を知り、あるいは目睹された王能憲氏や八木澤氏が、套印八卷本との書誌的な違いにまったく觸れない、というより違いに氣づかれていないらしいのはどういふ譯であらうか。流布本としての套印八卷本のイメージがあまりに強いたためなのか。現在、復旦大學圖書館に次の一本が藏されて

いる。

##### 【復旦大學圖書館藏 瀛初刻八卷本】

後補香色表紙（二七・〇×一七・二糎）。首に嘉靖乙未（十四年）袁褫「刻世説新語序」、萬曆庚辰（八年）王世懋「世説新語序」、さらに「世説新語篇目」があり、低一格にて高氏緯略を附す。卷頭は「世説新語卷之二／宋劉義慶撰／梁劉孝標注／明王世懋批點／後學凌瀛初校」と題し（ただし卷五以下は「後學凌瀛初校」の一行を缺く）、次行より「（低三格）德行第一／……」と本文へとつづく。左右雙邊（一九・五×二・〇糎）有界九行二十字、注小字雙行。句點・傍點・傍圈を附刻。眉上には王世懋の批語を附刻する。版心線黒口單黒魚尾「世説新語 卷之幾（丁付）」、下象鼻に刻工名・文字數を刻するところあり。唐大四冊。東京内閣文庫に藏本あり。篇目は以下のごとく、金・石・絲・竹・匏・土・革・木をもって八卷に分かつ。

- 金字集卷之一： 德行第一 言語第二上
- 石字集卷之二： 言語第二下 政事第三
- 絲字集卷之三： 文學第四 方正第五上
- 竹字集卷之四： 方正第五下 雅量第六 識鑑第七
- 匏字集卷之五： 賞譽第八上
- 土字集卷之六： 賞譽第八下 品藻第九 規箴第十
- 捷悟第十一 夙悟第十二 豪爽第十三
- 容止第十四 自新第十五 企羨第十六
- 傷逝第十七 棲逸第十八 賢媛第十九
- 術解第二十
- 革字集卷之七： 巧藝第二十一 龍禮第二十二 任誕第二十三

簡傲第二十四 排調第二十五  
木字集卷之八： 輕詆第二十六 假譎第二十七 黜免第二十八  
檢畜第二十九 汰侈第三十 忿狷第三十一

讒險第三十二 尤悔第三十三 紕漏第三十四  
惑溺第三十五 仇隙第三十六

ちなみに套印本二種で上・下の本文を分かち箇所異なるのあった「言語」「賞譽」兩篇は、「賞譽」篇についてのみ六卷本に一致する。

内閣文庫藏本は、大學頭林鶯峰（一六一七—一六八〇）による寛文十一年（一六七一）の跋が附された手校本で、鶯峰の筆により劉應登・喬懋敬・凌瀛初の序、董弁・陸游の跋が、套印八卷本に照らして抄補されている「圖3」。鶯峰もまた八卷本二種の差異にはとくべつ注意を拂わなかったようである。しかし、この刊本は套印八卷本とは全くの別版、しかも集評ではなく王世懋批點本という點、序題や卷名の立てかた等、その體裁は明らかに他の三種とは系統を異にしている。

ところで上述したように、清代の書目には濛初刻本を「原刻」とするものがあつた。套印本二種のみを目睹した王重民もまた、濛初刻本をして「初刻」と呼ぶのに躊躇していない。けれども、套印本二種に附される凌瀛初序の内容をやや注意深く讀めば、われわれはこの墨印八卷本を他の二種とともに濛初刻本の後へ位置づけることには、いささか疑問を抱かざるを得ないだろう。序にはかく言う。

……行之（濛初刻本）已久、獨失載圈點、未免有遺珠嘆。余復合三先生手澤、耘廬綴以黃、須溪綴以藍、敬美綴以硃、分次井然。

くり返しになるが、濛初刻本が刊行されてからしばらくの後、これに圈點が附刻されなかったのを残念に思った瀛初が圈點をくわえたり

吳興凌氏刻『世說新語』四種について

え眉批を三家評に絞り、一家一色の套印にしたところ此くも鮮やかで見やすくなった、というのである。つまり、濛初刻本の刊行後に瀛初がふたたび『世說新語』を刻した動機が、右に言うごとく「圈點をくわえること」と「三家の套印にして見やすくすること」にあつたとすれば、ただ一家王世懋批點の、しかも墨印本を、この套印本のさらに後に刊行するというのはいかにも不自然であろう。套印八卷本が濛初『世說』四種の中でも飛びぬけて傳本が多いことは先に觸れたが、それは當時の人氣の高さ、刊行された部数の多さを示すと考えられるところからも、墨印八卷本をあらたに刊刻する蓋然性は低いと思えるのである。

この點を考えるうえで手がかりとなるのが、版心下象鼻に附刻された刻工名である。そこには次の十九種の名が見える。

徐禎、楊子、張珮之、汝、士汝、英、禎六、禎士、禎、武、希、陶昂、昂、羅、士黃、黃士、巳、于、子<sup>②</sup>

これらを他の刊本に刻された刻工名と照合することによって、およその刊年が推定されるはずである。今、手元の李國慶編纂『明代刊工姓名索引』（一九九八年、上海古籍出版社）を引くと、「徐禎」は萬曆十一年刊『漢書評林』一百卷と萬曆十六年刊『春秋左傳註評測義』七十卷に、「陶昂」は同一書のほか萬曆九年刊『卓氏藻林』八巻にもその名が見える。このうち『漢書評林』と『春秋左傳註評測義』は濛初や瀛初の叔父凌稚隆の著書であり、しかも二本ともに濛刻本と思われることから、墨印八卷本の刻工と同一人物であるのはほぼ間違いない。この他、萬曆十年刊の凌迪知（濛初の父、嘉靖三十五年の進士）選『國朝名公翰藻』五十二卷（東京内閣文庫藏）では「徐禎、陶昂、昂、羅、禎、希、英、巳、子」が、また萬曆十二年刊『漢雋』十卷

(同文庫藏)では「禎士、禎、昂、英、希、羅」の刻工名が一致しており、刻書家と刻工がチームを組んで仕事をしていたらしい様子が窺えるのも興味深い。およそ萬曆十年前後に活動していた刻工たちであることがわかる。とするならば、墨印八卷本もその頃の刊、少なくとも萬曆末以降に出版された瀛初刻本よりも先に刻された可能性はかなり高いであろう。

こうしたことから筆者は、瀛初刻墨印八卷本が後刻『世説』四種の中で最も古いテキストであろうと考えていたが、今回これを裏付ける刊本を目撃する機会にめぐまれた。それは、凌氏が出版活動をおこなった浙江吳興のはるか南、建陽(福建省)の一書肆が刻した『世説新語』であった。

## 五 余碧泉刻『世説新語八卷』

『中國古籍善本書目』に「世説新語八卷 劉宋劉義慶撰 梁劉孝標注 明王世貞批點 明萬曆十四年余碧泉刻本」と著録されるこのテキストは、「王世貞批點」に見るごとく、書目の記述の上からは瀛初刻墨印八卷本(以下、瀛初刻本と略稱)とは何ら関係があるようには思われない。ところが、阿部隆一博士がつとに『中國訪書誌』(一九七六年、汲古書院)において臺灣國立故宮博物院藏楊氏觀海堂善本(楊守敬舊藏本)の解題を記された中にこの一本があり、そこには以下のごとく注目すべき特徴が記録されていた。

解題によると、この刊本は本文巻首を「世説新語卷之二／宋劉義慶撰／梁劉孝標注／明王世貞批點／後學凌瀛初校」と題し、巻八末尾題前には「萬曆丙戌孟春／余碧泉重繙梓」の蓮牌木記がある。さらに、「左右雙邊……有界九行、行廿字、注小字雙行。句點を附刻。王世貞

の批語を首書。版心線黒口「世説新語 卷之幾 (丁付)」、下象鼻に刻工名・大小字數を刻する所あり」と記されたその特徴はいうまでもなく、「王世貞批點」本とすることと木記以外、すべて瀛初刻本に一致するのである。余碧泉、堂號は克勤齋。通俗小説を多く刻したこと知られる福建の書肆余氏の一人である。出版した書で刊年のわかるものには他に、萬曆二十年刊『弇州山人四部稿選』十六卷がある。

もしも余碧泉刻『世説新語』が瀛初刻本の「重繙梓」、すなわち重刻本であるとすれば、瀛初刻本は當然ながら余碧泉刻本の木記にある萬曆丙戌(十四年)以前に刻されていなければならず、これは刻工名より推定される刊年とも矛盾しない。またそのばあい余碧泉刻本の「王世貞批點」とは、じつは王世愨の批語は底本のままで、巻首題の「世愨」のみを「世貞」と改刻した可能性が考えられよう。いずれにせよ、これらは實際に刊本を検査することで明らかになるはずである。この余碧泉刻『世説新語』は日本の公庫においては所在を知らず、南京圖書館藏本の目録を得て、ようやく右の諸點についての確認ができた。

南京圖書館に藏される丁丙(一八三三—一八九九)手跋本を検した結果、この刊本は巻頭題の「後學凌瀛初校」一行を巻五以下が欠くところまで瀛初刻本そのままの、しかしながら坊刻の例にもれない刊刻不精な覆刻本であった。問題の「貞」の字は他の文字に比べて不自然に小さく、「世愨」の一字を改刻した跡が明らかに見てとれるが、これはもちろん、王世愨よりもはるかに有名な兄、王世貞の名に假託して射利を目論んだ書肆の改竄にほかならない(圖4)。しかも王能憲氏も言われたように、明代の『世説新語』出版ブームに火をつけたのは王世貞刪定『世説新語補』の流行であり、とくに萬曆年間當時は



「臨川（劉義慶）本は流傳已に少なく、獨り『補』のみ世に盛行す。一再傳じて後、海内に復た臨川有るを知らず」といわれるほど、『世説新語』と王世貞の名とは不可分の關係にあつたのである。もはや瀛初刻墨印八卷本が凌刻四種の中で最も古い、しかも萬曆十四年以前に刻された刊本と斷定して差し支えあるまい。

ところで先に考察を保留しておいた凌瀛初序の冒頭には、次のように記されていた。

二十歳の時、幸運にも王世懋批點の『世説新語』を目睹した。その觀點は新鮮かつ周到で素晴らしかつたが、豫章の役所内から刊行されたため廣く流布することがかなわぬのを残念に思つていた。壬午（萬曆十年）の秋、嘗てこれを上梓するよう命じたが、惜しいことに刊刻間もなく版木が散逸してしまつた。自分は志を持ちつつも、未だ及ばなかつた。

王重民はこの部分について、「壬午の年に『これを上梓するよう命じた』のが誰なのかはわからないが、豫章刻本を指すようだ」とコメントするのみであつたこと、すでに述べたとおりである。けれどもここに言う「壬午」の年、すなわち萬曆十年（一五八二）に刊刻を命じたというその刊本こそ、瀛初が刻した最初の『世説新語』たる墨印八卷本を指していることは、今や疑いの餘地はないであらう。

瀛初は豫章で出版された王世懋批點本を愛し、これを萬曆十年に重刻刊行したのであらう。しかしどんな事情があつたのか、その版木は早くに失われ、以來再刊の志をもちながらも機會を得なかつた。ところが萬曆末に、従弟の濛初が馮夢禎の藏本によつて集評本を刻し、これが凌刻『世説』としてその後しばらく世に行われた。が、失われた王世懋批點本の再刊を積年の願いとする瀛初には、濛初刻本が圈

點を缺くのはいかにも残念に思われた。そこで、濛初刻本を底本としてあらたに套印六卷本を刊行、さらに修訂をくわえ套印八卷本とした。——凌刻『世説』四種の刊刻の経緯は、およそこのようであつたと想像して大過ないであらう。

瀛初が一人で三種もの『世説新語』を刊行し、結果的に凌刻『世説』が四種の多きにのぼることとなつた背景に、『世説』ブームと套印本という時代の潮流のあつたことはもはや言うまでもない。しかしそれらはまた同時に、失われた萬曆十年刻本に對する瀛初自身の思い入れの所産であつた。もとより、瀛初の序文こそが最も端的に凌刻四種の全體像を語つていたのである。

## 六 おわりに

以上の考察により、凌刻『世説』四種刊刻の経緯およびテキスト間の關係についてはほぼ明らかにしたと思われる。ところで、二十歳の瀛初が目睹し、これら凌刻『世説』を生み出すいわば原動力ともなつた王世懋批點の、いわゆる「豫章刻本」（以下、豫章刻本と稱す）とは、ではいつたどのような刊本だったのか。そこで最後にこの點についていささか付けくわえ、あわせて筆者の氣づいた問題を記してみたい。

豫章刻本の流れを汲む刊本のうち現在われわれが最も容易に目にし得るのは、王世懋の友人でもあつた張文柱（字は仲立、江蘇崑山人）校注の『世説新語補』二十卷であらう。これは萬曆十三年（一五八五）、すなわち瀛初の墨印八卷本が刻された三年後に、張文柱が王世貞刪定『世説新語補』に豫章刻本を併せて校訂刊行した書であり、じつは前述の、明代に流行した『世説新語補』とは、李卓吾批點本も

含めこの張文柱校註本であつた。つまり豫章刻本は、凌刻本と李卓吾批點本という『世說新語』の普及と傳播にとつて計り知れない効果のあつた(王能憲氏)版本が、ともに依據したテキストなのである。しかるに、豫章刻本にはすでに傳本がなく、わずかにそこに附されていた萬曆八年(一五八〇)の王世懋序のみが、凌刻『世說』等によつて今日に傳つたとされているようである。

豫章刻本は現在その卷數さえも明らかではない。八卷本とする説が八木澤氏に見えるが、管見の及ぶ限りではそうした刊本の存在は確認できなかった。唯一傳つたとされる萬曆八年王世懋序によると、王世懋は幼いころより『世說新語』を好み、研究校訂を重ねて本文の難解な箇所は明らかにし、また劉孝標注に後世竄入した部分は明示してこれを帳の内に秘していたが、公にせんと考えていた折しも參知喬公の目にとまり刊行されるに至つたという。ところで、ここで注目されるのが「參知喬公」なる人物である。

「喬」という姓でまず思いあたるのは、凌刻『世說』のうち三種に翌萬曆九年の序を附す喬懋敬であろう。喬懋敬、字は允徳、上海の人、嘉靖四十四年(一五六五)の進士。上海圖書館にも藏本のある王世懋批點『世說新語』三巻を出版したことが知られ、序はその時に書かれたものである(ただし上海圖書館藏本はこの序を缺く)。さてそこには、「督學麟洲王公(世懋)は今古に該洽し、是の書に於て尤も篤嗜爲り。時に批評竄點有り、覃精して章を絶するも、自らは其の心を用いること勤なるを知らず。余幸いにして焉を觀ることを獲たり。……遂に請いて諸梓に傳う」とあり、これはいうまでもなく先の王世懋序の内容にも合致する。どうやら萬曆八年の王世懋序は、喬懋敬刻本のために書かれたものである可能性が高そうだ。そこでこの點を

確かめるため、二つの序が書かれた當時の王・喬兩氏の事跡をたどつたところ、思いがけず興味深い結果を得た。それは、兩氏の接點がほかでもない、豫章にあつたことである。

まず王世懋は、萬曆四年(一五七六)江西布政司左參議、同六年に江西按察司副使となり、その後萬曆八年八月に陝西提學副使に敍せられて翌月には任地へ赴いている。一方、喬懋敬は萬曆四年もしくは五年に江西布政司左參政となり、同九年に湖廣布政司左參政に移つたことが知られる。周知のごとく、豫章すなわち南昌府は、明代には江西の會城であり、布政使司や按察使司等の役所はここに置かれたのであつた。兩氏が歴任した參政・參議・副使は、各役所の長たる布政使・按察使を補佐し、また地方に派遣されて行政や司法の監察に當たる屬官である。つまり二人は序を書いた當時、ほぼ時期を同じくして豫章に置かれた役所に屬し、しかも少なくとも一年間は布政使司における同僚だったのである。萬曆八年の王世懋序は、やはり喬懋敬刻本のために書かれたものに相違あるまい。それはともかく、喬懋敬刻本の刊行が豫章の地に由來するという右の事實は、あるいは喬懋敬刻本こそがすでに佚したとされている豫章刻本ではないかとの想像をゆるすであろう。

しかしここで一つ問題となるのは、前掲凌瀛初序にいう「豫章藩司中より刻さるるを以て、家傳戶誦すること能わざるを恨みと爲す」との記述である。「藩司」とは布政使の別稱、また布政使司の俗稱でもあり、つまり序文は豫章刻本が江西布政司より出された官刻本であることを言うものと理解されよう。王世懋批點本の刊刻を命じたとき喬懋敬もまた江西布政司にあつたこと、すでに見たとおりである。けれども、上海圖書館に藏される喬懋敬刻本を目睹した限りでは、こ

れを官版とする決め手は残念ながら筆者には見出すことができなかった。喬懋敬刻本が官版でないとするならば、豫章刻本はやはり別に存在したことになる。ただし、喬懋敬刻本の版心下象鼻に名を附刻する刊工の多くは豫章地區で活動したことが知られ、よってこの刊本も豫章で刻されたことはほぼ間違いないようである。いずれにせよ、これを明らかにするにはさらに細部にわたって刊本を検しなければならず、またその際には瀛初刻墨印八卷本との慎重な比較照合が不可欠であろう。以上については、調査を終えしだい改めて報告する所存である。

ちなみに喬懋敬刻本の巻頭題・匡郭・行格・版心の書誌的特徴は、卷敷を刻す部分と「後學凌瀛初校」の一行以外は瀛初刻墨印八卷本に一致し、かつ「賞譽下」本文の始まる箇所も同じであることから、この二本がきわめて近い繼承関係にあるのは確かであろう。

最後に、凌刻四種全體の流れをもう一度まとめておくことにする。

「王世懋豫章刻本」(萬曆十年重刻) ↓ 凌瀛初刻墨印八卷本  
↓ (修訂) ↓ 瀛初刻套印六卷本 ↑ 凌濂初刻本  
↓ 同套印八卷本

### 注

- (1) 凌氏の刻書活動については、拙論『明末吳興凌氏刻書活動考—凌濂初と出版—』(一九九八年、『日本中國學會報』第五十集 参照)。
- (2) 一九九六年、上海古籍出版社。
- (3) 王重民『中國善本書提要』(一九八三年、上海古籍出版社) 子部小說類「世說新語八卷」の條による。
- (4) 莫友芝撰傅增湘訂補『藏園訂補邵亭知見傳本書目』(一九九三年、中華書局) 卷一一上「世說新語三卷」の條には、傅氏の訂補する瀛初刻

吳興凌氏刻『世說新語』四種について

套印六卷本が「世說新語注六卷」として著録され、「別有八卷本、與此分卷不同、似即以此本增補者」と、套印八卷本が六卷本に後れる可能性を指摘する。しかしこの書目は一九八八年まで傅氏の遺稿として長く未整理のままであった。

- (5) 王重民の凌刻『世說』に關する論考は注(3)所掲ほか、同書『世說新語六卷』、「世說新語補二十卷」の各條、および「套版印刷法起源於徽州說」(一九九二年、『冷廬文獻』所收、上海古籍出版社。原載一九五七年『安徽歷史學報』第一卷第一期) 参照。

- (6) 明の何良俊が『世說新語』を増補して「何氏語林」を作り、王世貞はこれを刪定して『世說新語補』としたという。なお日本における『世說新語』の流行については、大矢根文次郎「江戸時代における世說新語について」(一九八三年、『世說新語と六朝文學』所收、早稻田大學出版部) 参照。

- (7) 八木澤氏の凌刻本に關する解説には、「凌濂初」と「凌瀛初」の名、および八卷本二種について混淆が見られる。

- (8) 楊勇氏が版本について專論した「世說新語「書名」「卷帙」「板本」考」(一九七〇年、香港大學『東方文化』八卷二期所收)も、「凌瀛初刻本」とするのみである。

- (9) 余弱冠時、幸晤王次公批點世說一書、發明詳備可稱鉅觀。以刻自瀛章藩司中、不能家傳戶誦爲恨。壬午秋、嘗命之梓。殺青無幾、惜板忽星失。余唯是有志、而未逮也。嗣後家弟初成、得馮開之先生所秘辰翁・應登兩家批註本、刻之爲鼓吹。欣然曰、向年靈簡殘編已成煨燼、今獲摺據其全。良爲快事。行之已久、獨失載圖點、未免有遺珠之嘆。予復合三先生手澤、松廬綴以黃、須溪綴以藍、敬美綴以硃、分次井然。庶覽者便於別識云(上海圖書館藏の套印八卷本による)。

- (10) 東京内閣文庫藏の凌約言撰『鳳笙閣抄四卷附一卷』目錄末には、校訂に参加した子孫十四人の名が刻され、「孫」として凌初等とともにそ

- の名が見える。
- (11) 上海圖書館藏本による。
- (12) 壬午爲萬曆十年、『嘗命之梓』不知誰指、但似指王世懋濛章刻本(注(3))所掲本「世說新語六卷」の條。
- (13) 『光緒』江西通志』卷一四六。
- (14) 注(13)所掲。
- (15) 『明史』卷二八七。
- (16) 注(3)所掲本「世說新語六卷」の條。原文は「……正文用墨。正文不避啓、禎諱、亦濛初先刻墨板、而瀛初後刻套板之證也」。同條には「瀛初套版既與濛初墨版相配、亦必爲六卷」ともあり、「套板」と「套版」の語を使い分けている。「濛初墨版」とは濛初刻本が墨印本であるとの考えを示したものと思われるが、しかし王氏のちに發表した「套版印刷法起源於徽州說」(注(5)所掲)注には「據濛瀛初的跋、大概是濛初先用兩色套版刻過劉辰翁、劉應登兩家評語」と述べ、濛初刻本は套印の二家批注本かと疑っている。
- (17) 注(3)所掲には「第三六丁」とあるが、訂正した。
- (18) 「鼓吹諸家姓氏」には十一人の名と引用書名を挙げ、さらに自注を加えた旨を注記するが、實は眉上にはもう一種「劉本註〇」と題する注が見える。卷上之上、第一丁裏の劉本註の後には濛初の按語を附して「按凡稱劉本註、俱劉應登本中者、……或應登自註、又或孝標原註、俱不可考。概列之上方」と説明している「圖一」。
- (19) 東京内閣文庫には清刊覆刻本が藏される。
- (20) 「鼓吹」の稱の所以については序に、劉孝標が「鼓吹」の語を「羽翼(補佐する)」と解することによると言い、具體的には、批語を載せる諸家名を「鼓吹諸家姓氏」とするほか、合刻した王世貞刪定『世說新語補四卷』の各卷首に「世說新語補卷之幾 鼓吹一」と題す。
- (21) 濛初と馮夢禎との關係については、注(一)所掲参照。
- (22) この點を考える上では、この刊本が墨印本であることも考慮されるべきであろう。現存の濛初刻本は、凌氏の著書を除けばこの『世說新語』以外すべて朱墨套印本であり、しかも眉批を附刻する「評點本」は套印本が最も好むテキスト形式であった。よって濛初刻『世說』が、吳興における套印本出版の始まる萬曆四十四年(一六一六)以前の刊刻だった可能性は大きいと思われる。
- (23) 『四庫全書總目』卷一四三「世說新語補四卷」(江西巡撫採進本)、および歌文光『萬卷精華樓藏書記』(一九九三年、清人書目題跋叢刊九、中華書局影印)卷九九「世說新語六卷補四卷」の各條による。
- (24) 六卷本が「劉本註〇」とするのは、濛初刻本の表記を踏襲したからである(注(18)所掲参照)。しかしこの表記は、濛初序に言う「耘廬は綴るに黄を以てす」に合致しないため、後ろ三字を改刻したのであろう。なお、京都大學人文科學研究所附屬東洋學文獻センターに藏される影印六卷本(據美國布哇東西文化研究所藏本)は、この三字の改刻がすでになされた一本である。他の修訂箇所の有無については、今のところ詳細に比較照合する便宜が無いため贅言を避けるが、この刊本の存在は、六卷本の段階で少なくとも一度は修訂が行われており、八卷本への修訂は「遞修」であったことを示すものである。
- (25) 注(4)所掲本「世說新語三卷」の條には莫友芝著録の「明凌氏刊八卷、附補四卷」が見え、あるいはこれが瀛初刻墨印八卷本を指すか。ただし、王世貞刪定『補』を合刻する凌刻『世說』は濛初刻本のみである。
- (26) 海外では日本以外、臺灣國立故宮博物院、同中央圖書館、美國哈佛大學哈佛燕京圖書館にも藏本のあることが知られる。
- (27) ここでは「土黃」と「黄土」、「昂」と「陶昂」など同じ人物を指すかと思われるものも、表記が異なれば別々に敷えた。
- (28) 『國立故宮博物院善本書籍總目』は、該一本を「凌濛初校」として著

録する。

(29) 謝水順他『福建古代刻書』(一九九七年、福建文化叢書、福建人民出版社) 参照。

(30) このほか眉批の周圍を圍んだり、墨格だった部分(卷六第四三二頁)に妄りに文字を補うなどの手を加えている。王能憲『世說新語研究』(一九九二年、江蘇古籍出版社)はこの丁丙手跋本について、瀛初刻套印八卷本とは篇目等が一致しないことを理由に「凌瀛初校」としてのことと自體を疑い、また「後學凌瀛初校」を缺く四冊は補配であるとしている。これらの誤解は、氏が瀛初刻墨印八卷本を實見していないことによるものであろう。同書三五頁、六六頁参照。なお南京圖書館にはもう一本、丁丙手跋本と同版の刊本が藏される。

(31) 南京圖書館藏凌瀛初刻『世說新語三卷 世說新語補四卷』の瀛初序による。

(32) この間の經緯は、そこに附された萬曆十三年王世懋序に詳しい(東京大學東洋文化研究所藏明刊本『世說新語補二十卷』参照)。

(33) 注(30)所掲の王能憲『世說新語研究』一〇四頁参照。

(34) ただし八木澤氏は「豫章刻本」という言葉は用いておらず、「萬曆八年には、王世懋批點八卷本ができた」とされる。また注(8)所掲論文で楊勇氏が「范氏天一閣書目子部小說類稱『世說新語八卷、明王世懋評。』……未可知也」としている刊本は、『天一閣書目』の該箇所にこれが凌瀛初刻本であることが明記されている。

(35) 余幼而酷嗜此書。中年彌甚。恒著巾箱。鉛槧數易。韋編欲絕。第其句或勾棘。語近方言。句深則難斷。語異則難通。積思累校。小獲疏明。終乎闕疑。以遵聖訓。至於(劉)孝標一註。博引旁綜。前無古人。……而頗爲俗夫摻入叔世之譚。恨不能盡別濁滄。時一標出。以洗卯金氏(劉孝標)之冤。初雖闕之帳中。既欲公之炙嗜。而參知喬公見之。亟相賞譽。即授梓人(東京内閣文庫藏の套印八卷本による)。

吳興凌氏刻『世說新語』四種について

(36) 陸樹聲撰『陸文定公集』卷四「方伯喬公墓表」。

(37) 督學麟州王公該洽今古。於是書尤爲篤嗜。時有批評蠶點。覃精絕韋。不自知其用心之勤矣。余幸而獲觀焉。……遂請而傳諸梓(注(35)所掲本による)。

(38) 上海圖書館には吳騫(一七三三—一八一三)の手跋が附された喬懋敬刻本が藏されており、王世懋序のあとに「萬曆辛巳刊本、尙有雲間喬懋敬題詞、蓋即敬美所謂參知喬公也」と書き入れられ、參知喬公とは喬懋敬であろうとしている。

(39) 鄭利華『王世貞年譜』(一九九三年、復旦大學出版社)および注(13)所掲卷一三参照。

(40) 注(36)所掲、および注(13)所掲卷一三参照。

(41) 王世懋序の年記には「萬曆庚申穉(秋)」とあり、これが江西を離れる直前に書かれたものと知れる。ちなみに王世懋序に言う「參知」とは、喬懋敬の官である參政が宋代には參知政事の略稱であったことにより、また喬懋敬序に「督學」と言うのも、萬曆九年の段階で王世懋が提學副使(督學と稱す)であった事實に符合する。

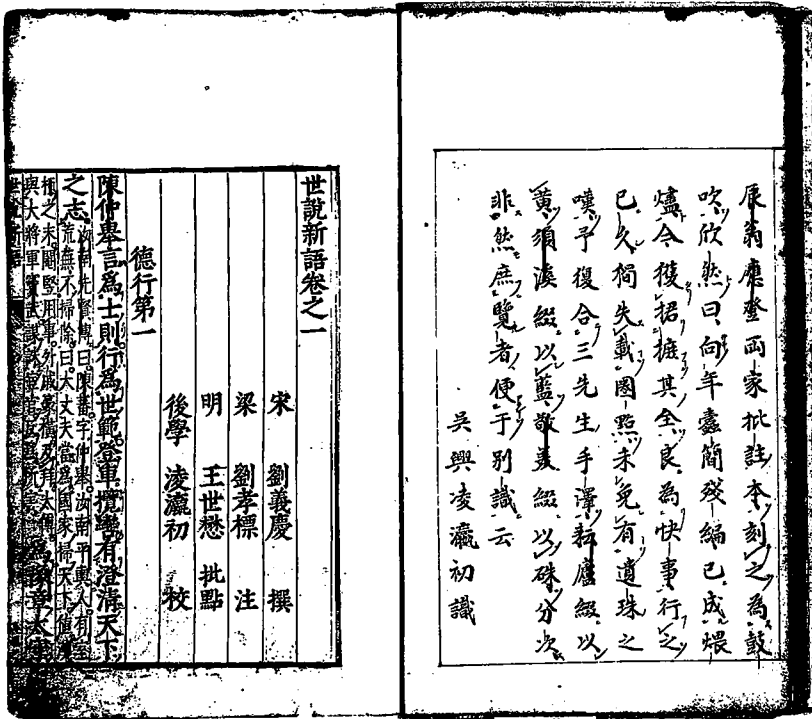
(42) 刊工名のうち「錢世傑、鄒彥、鄒興、陳元、元、姜伯勝、姜」が萬曆間刊『(萬曆)新修南昌府志』三十卷(東京内閣文庫藏)に見えるほか、「姜伯勝、熊昇三、錢世傑」が『咸賓錄』八卷(重刻本は豫章叢書收)に、「熊俊」が萬曆三十二年江西布政司刻本『本草綱目』に見える。ここに地方志や布政司刻本といった、官版を含む點も注目されよう。なお喬懋敬刻本は、管見の限り日本の公庫においては所在を知らない。

(付記) 凌刻『世說』四種等の閲覽には、復旦大學陳麥青先生・吳格先生、上海圖書館王翠蘭先生、南京圖書館沈燮元先生の御高配を賜った。記して厚く感謝申し上げる。



圖3 凌瀛初刻八卷本（東京内閣文庫蔵）

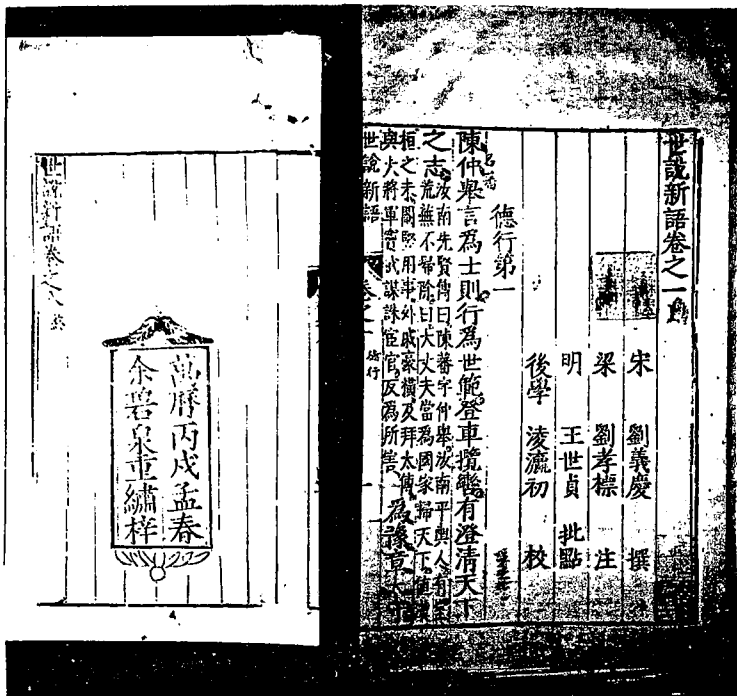
右丁は林鶯峰による抄補。



吳興凌氏刻『世說新語』四種について

圖4 余碧泉刻八卷本（南京圖書館蔵）

版心の「德行」は書き入れ。



二〇七